

里庄町の川の跡から縄文土器を発見!

マキサヤ遺跡

浅口郡里庄町新庄

一般国道2号(玉島笠岡道路)改築工事に伴い、平成27年10月から平成28年12月までマキサヤ遺跡の発掘調査を行いました。今年度は谷の入り口にあたる低い場所を調査したところ、南から北へ流れる2つの大きな川の跡が見つかり、それぞれで重要な発見がありました。

現在の干瓜川^{ほしうり}の近くで見つかった川の跡は、縄文時代から中世まで流れていたようです。この西岸沿いの一部では縄文時代に堆積した土が残っており、その中から多くの縄文土器(後期:約4,000年前)が出土しました。土器がまとまって見つかったことや文様などの残りが良いことから、近くで生活していた人々が壊れた土器などを捨てていたことが分かります。岡山県では、1つの遺跡で縄文土器が多く見つかった例は少ないため、とても貴重な資料になりました。

また、もう一方の川の跡では、約30mにわたって川岸に沿うように木杭を打ち込み、枝木を組み合わせた護岸^{まがき}が見つかりました。この護岸は、古墳時代後期~室町時代(約1,400~600年前)の間に作られたと考えられます。通常、土に埋もれた木は腐って分解してしましますが、今回は水分量の多い土に埋まっていたため、残りが良い状態で見つかりました。(森本直人)



縄文土器が見つかった川の跡(北から)

岡山県庁の南西側で、警察本部庁舎の整備事業に伴う発掘調査を実施しています。江戸時代の絵図によると、調査区は岡山城二の丸の南東端で侍屋敷が広がる地点にあたります。

調査では、現地表から約1mの深さで、石積みの溝や瓦の詰まった穴が見つかりました。このうち、東西方向にまっすぐな2条の溝は、近代以降に造られたもので、絵図に描かれた屋敷地間の通路にほぼ重なることから、通路の両側溝と考えられます。溝間の距離は6.2mで、調査区外西側の現道幅とほぼ一致し、江戸時代の屋敷地割を踏襲していることが分かります。(氏平昭則)



2条の石積み溝（北西から）

百間川は、岡山城下を旭川の洪水から守る目的で17世紀後半に造られた放水路です。旭川との分流部には、両河川の流れを分けるための「背割堤」という堤防が約1.3kmにわたって築かれていますが、その北端近くにあるのが「一の荒手」です。

一の荒手は、背割堤の一部を低くして、増水時に旭川の水を百間川に流入させるための施設です。越流部の両側に取り付く背割堤の先端には、「巻石」と呼ばれる石積み構造物が築かれており、越流部と巻石を合わせた荒手の全長は約175mです。百間川分流部の改修に伴う今回の調査によって、これまで土砂に埋もれていた巻石が再びその全容を現しました。

上流側巻石の規模は、全長約22.5m、幅約10.5m、高さ約4.6mを測ります。下流側巻石はやや小規模で、全長約18.5m、幅約8.0m、高さ約4.5mです。どちらの巻石も、土砂を盛り上げながら「間知石」と呼ばれる、四角形に加工した花崗岩の石材を「谷積み」という技法で積み上げて構築しています。石材の積み方や加工痕跡などから、現存する巻石は江戸時代のものではなく、明治以降に改修された後の姿と考えられます。

一の荒手の巻石は、その歴史的意義を後世に伝えるため、補強工事を施したうえで現地保存される予定です。本誌前号で紹介した二の荒手と同様に、百間川の貴重な土木遺産のひとつとして、歴史学習や防災教育への活用が期待されます。(岡本泰典)



上流側の巻石全景（南西から）



下流側の巻石全景（東から）

平成26年度に神明遺跡（総社市福井）で出土した銅鐸について、第一線で活躍されている研究者・研究機関により、最新技術を用いた調査が行われました。その成果の一部を報告します。

科学分析の結果

神明銅鐸は、A面の鈕の外縁に3～4条の条線からなる横型流水文状の特異な文様を飾る、全高31.6cmの四区袈裟襷文銅鐸です。両面の内面突帯の位置の外面に帯状にひけのくぼみがある、A面の菱環の付け根にひけのくぼみがある、青銅の中に気泡がかなり入っていることが確認できるといった特徴から、石型で铸造したと判断でき、細く退化した菱環の形状なども考え合わせると扁平鈕式古段階に属する可能性が高いようです。この神明銅鐸について平成27年に科研費（基盤研究（B）「弥生時代における青銅器生産の総合的研究」課題番号25284162）により鉛同位体比分析とICP分析を実施したので、その結果を速報します。試料は奈良文化財研究所において内面突帯から採取し、分析は日鉄住金テクノロジー株式会社尼崎事業所解析技術部分析技術室で実施しました。

神明銅鐸の鉛同位体比は、中国前漢鏡や外縁付鈕1式末以降の銅鐸などと共通する、いわゆるA領域に属します（表1）。

ICP分析によれば、錫濃度と鉛濃度がともに1.33%と非常に低くなっています（表2）。また、銅に不純物として含まれていたと考えられるヒ素が0.512%、アンチモンが0.491%と、朝鮮半島産と考えられる原料金属を使用していた段階のそれよりもずっと高く、中国華北産と考えられる原料金属を使用していた段階の青銅器と共通する濃度です。これは、前記の鉛同位体比分析の結果とも整合しています。銀がほぼ0.1%含まれていることや金をわずかに含んでいることなども、この段階の中国産原料で作られた青銅器に共通する特徴です。（奈良文化財研究所客員研究員 難波洋三）

$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
17.573	15.509	38.155	0.8825	2.1712

表1 鉛同位体測定結果

（単位：wt%）

Cu	Sn	Pb	As	Bi	Ni	Zn	Fe	Mn	Ag	Sb	Co	Au	Cr	Mg	Si	Ca	Al	B	W
93.70	1.33	1.33	0.512	0.032	0.153	<0.001	0.011	<0.001	0.115	0.491	0.046	0.007	<0.001	<0.001	0.010	0.001	<0.001	<0.001	<0.001

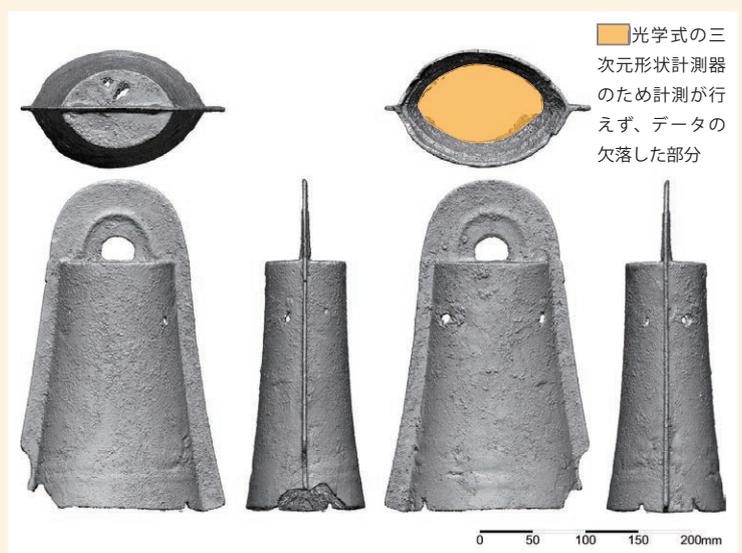
表2 酸可溶分の定量分析結果

三次元形状計測について

計測に使用した三次元形状計測装置は、GOM社製のATOS Compact Scan 5 Mシステムです。レンズは計測点間距離が62 μm のMV150を使用し、計測には約4時間要しました。

三次元形状計測画像を使用すると、銅鐸の立体的な比較が可能となります。これにより平面的な比較を中心としてきた同範銅鐸の分析に新たな手法を付け加えました。今回得たデータは本銅鐸に同範銅鐸が発見された際、製作順を考える基礎データとなります。

なお、本計測はJSPS科研費25284161の成果の一部で、計測には勝川若奈より技術的な協力を受けました。



神明銅鐸 三次元形状計測画像

（奈良県立橿原考古学研究所 水野敏典・山田隆文・奥山誠義・北井利幸）

中世城館跡総合調査

岡山県では、約1,100か所にのぼる中世城館が確認されていますが、その数は全国でも6番目の多さです。センターでは、こうした中世城館跡を訪ねて記録する「再発見！ふるさとの山城－中世城館総合調査－」を平成25年度から7か年の予定で進めています。これまでによろやく600か所余りの調査が終わったところです。4年目にあたる今年度は、真庭市・井原市・笠岡市・里庄町・久米南町・新庄村に所在する226か所を対象に調査を行ってきましたが、その中にはとても興味深い山城もありました。

真庭市にある才田城跡^{さいだ}は、尼子氏^{あまこ}や毛利氏^{もうり}・宇喜多氏^{うきた}など、有力な戦国大名が争奪戦を繰り広げた要衝であり、何段にも曲輪^{まがわ}（尾根筋や斜面に造成した平坦地）を連ねた整美な姿をしています。また同市にある陣山城跡^{じんやま}は、1579年に毛利氏が、宇喜多氏の守る大寺畑城跡^{おおでらはた}・小寺畑城跡^{こでらはた}を攻略するために築いた陣城です。この城は、なんと約1.8kmにもわたって曲輪や土塁を連ねており、その規模の大きさには圧倒されます。井原市にある高屋城跡^{たかや}は、1568年、同市芳井町の有力国人であった藤井氏^{ふじい}が、毛利氏に抗した際の山城です。5重に遮断する堀切や、城を半周するように設けられた畝状堅堀群^{うねじょうたてぼり}からは、当時の緊迫感が伝わってきます。

来年度は、津山市・鏡野町・総社市・矢掛町の調査を進める予定ですので、その成果に御期待ください。

（小林利晴）



陣山城跡と大寺畑城跡・小寺畑城跡

講演会「群雄の城－備前・播磨－」

1月21日（土）午後、県立図書館において、中井均先生（滋賀県立大学教授）、山上雅弘先生（兵庫県立考古博物館学芸員）、当センターの澤山孝之総括副参事の3名による講演会を開催しました。

中井先生は、織田信長が築いた安土城に見られる高石垣や金箔瓦、礎石建ちの天主から、この城を統一政権のシンボルとして築かれた「見せる城」と評価する一方、山上の立地やその縄張りから戦国時代の山城構造から脱却できなかった城と位置づけられました。そして、豊臣秀吉の大坂城に見られる大規模な石垣構築システムや大量の瓦供給体制の完成、金箔瓦を利用した権威づけの拡大を評価し、大坂城こそが近世城郭の父と評価されました。

山上先生は、守護の格式を表現する赤松氏の城や、曲輪に先立つ小規模な平坦地のある城、大阪湾岸の城に見られる土壁構造の建物など、播磨地域の特色ある城や構造を紹介されました。

澤山総括副参事は、平成25年度から県下で実施している中世城館跡総合調査の成果を踏まえて、備前地域の全長200mを超える大規模な山城は河川の合流点や街道沿いといった交通の要衝に位置していて、東備前の浦上氏や西備前の松田氏らによる支配領域経営の拠点として機能したと評価しました。



中井均先生の講演



山上雅弘先生の講演

講座「吉備路の考古学」

9月24日（土）と11月27日（日）の午後、「吉備路の考古学」と題して2回の講座を行いました。当初はセンターでの開催を予定していましたが、定員を大幅に超える応募があったため、会場を岡山県立博物館に変更して実施しました。この講義を踏まえて、2月25日（土）には吉備路の遺跡をめぐるバスツアーを行いました。参加した皆さんはこの地がたどった歴史の重さに感銘を受けているようでした。

弥生の村と墓

現在、「吉備路」と呼ばれる地域には、弥生時代の集落や墳墓の遺跡が数多く存在します。その中に^{たてつき}楯築遺跡という、築造当時全国で一番大きな墓があります。楯築遺跡が造られるころから、その眼下にある集落遺跡では^{たてつき}楯築遺跡の大きさに格差が現れ始めます。この地域の鉄器出土数が、県内で一番多くなってくるのもこの時期です。一部の有力者に、富や権力が集中し始めたのでしょう。また他地域との交流を物語る土器も増加してきます。楯築遺跡の築造は、墳墓の面からみても集落の面からみても画期であったのです。（小林利晴）



講座第1回の様子

造山・作山古墳とその周辺

近年、3次元計測やレーザー測定の成果はめざましく、造山・作山古墳についても、畿内の大形前方後円墳との墳丘の比較研究をより高い精度で行うことが可能となっています。発表では、前方後円墳の墳丘を構成する重要な要素である「^{つくりだ}造出し」について、位置や墳丘下段テラスとの高さの比などに注目し、その時期的変遷と造山・作山古墳の位置づけを明らかにしました。また、造山古墳と古市古墳群の^{ふるいち}菅田御廟山古墳の墳形を比べると、くびれ部の両側に「^{つくりだ}造出し」を備えることや前方部頂における方形壇の存在などが共通します。造山・作山古墳とも、古市古墳群の墳丘型式変化の流れの中にあり、両者の政治的な結びつきを意味していると考えられます。（弘田和司）



バスツアーの様子

巨石墳から見える吉備

吉備三大巨石墳の筆頭であるこうもり塚古墳は、6世紀後半において最大級の前方後円墳であり、横穴式石室は全国屈指の規模を誇ります。周辺には巨石墳に次ぐ規模の大形石室も集中しており、こうもり塚古墳の被葬者を頂点とする強大な備中勢力の存在が想像できます。それを示すように石室構造や石棺石材には強い独自性が見えますが、墓制としては中央指向の高さがうかがえます。以上の点は備中勢力の卓越した権力構造を示すだけでなく、中央政権が地域の最有力者を国造に任命し、地方支配を進めていく過程を映し出しています。（柴田英樹）

吉備の道をたどる

吉備は、九州と近畿の間の中国にあつて、道の国と呼ばれた交通の要衝でした。その中心を占める「吉備路」の^{なかつくに}一帯は、川嶋河（高梁川東分流）の河口に開かれた港津を拠点に各地との交渉を取り持ち、「倭国」の形成に重要な役割を果たしました。古墳時代には大王陵に匹敵するような巨大古墳を築く首長も現れましたが、その地位は中央政権との関わりによって変動するような不安定なもので、奈良時代には地方役人へと姿を変えていきました。しかし、この時代にあつても、吉備の玄^{つさきのうまや}関口にあたるこの地の重要性が薄れたわけではなく、いち早く整備された津峴駅や近国にはまれな備中国分寺・国分尼寺の偉観は、そのことを雄弁に物語っています。（亀山行雄）

平成28年度の企画展・特別展

4月26日（火）から8月17日（水）まで、企画展1として「土器をよむ1」と題した展示を行いました。これは、弥生土器や土師器に残る製作・焼成・使用の痕跡から、どのような情報が読み取れるのか、分かりやすく展示・解説したものです。8月19日（金）から11月27日（日）には、企画展2「吉備路の巨石墳－こうもり塚古墳－」として、吉備路を代表する史跡こうもり塚古墳や江崎古墳の出土品を中心に、吉備の後期古墳文化を紹介する展示を行いました。現在は、平成29年1月11日（水）から4月19日（水）までの予定で、企画展3「山なみを越えて」を開催しています。これは、岡山県立博物館において開催された岡山・鳥取文化交流事業Ⅱの展示と連携したもので、山陰や北陸といった日本海沿岸地域とのつながりを示す吉備の出土品を展示し、中国山地を越えた交流の歴史を紹介しています。また、5月10日（火）から6月30日（木）には、「吉備の貌（かたち）」と題した特別展示を開催しました。倉敷で開催されたG7教育大臣会合に合わせて企画したもので、弥生時代から古墳時代の吉備を代表する絵画土器や造形品を集めて展示しました。センターでは、来年度も引き続き吉備の埋蔵文化財の魅力を紹介していきますので、ぜひ一度ご覧ください。



企画展2の開催状況

東北の大地からの便り

東日本大震災の復興調査に係る職員の広域派遣が5年目を迎えた今年度は、全国各地から約30名の職員が岩手・宮城・福島に3県に派遣され、地元の職員と協力しながら復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を迅速かつ効率的に進めてきました。

岡山県は平成24年度から宮城県へ職員を継続して派遣しており、今年度は多賀城市内館館跡、気仙沼市台の下遺跡の発掘調査に協力しました。

多賀城市内館館跡の調査は圃場整備事業に先立って行われ、平安時代の井戸跡や溝で区画された畑跡、複数の溝に囲まれた室町時代の館跡が見つかりました。

一方、気仙沼市台の下遺跡は集会施設建設に伴って調査され、縄文時代後期を中心とした貯蔵穴群や土器等の捨て場、カマドや鍛冶炉を伴う平安時代の竪穴住居跡が確認されました。

両遺跡ともに発掘調査の成果を広く公開するため現地説明会を開催したところ、県内外から多くの方々の参加がありました。被災地の復旧・復興が進むなか、地域に愛着をもち、伝え守られてきた歴史や文化遺産に関心を寄せられる姿が印象的でした。（米田克彦）



内館館跡の発掘調査（多賀城市）



台の下遺跡の現地説明会（気仙沼市）

利用者の声

古代吉備文化財センターでは、小・中学校による施設見学や職場体験などの受け入れを行っており、来所された児童・生徒のみなさんから感想のおたよりをいただくことがあります。ここでは、文化財センターに寄せられた利用者の「声」のなかから、いくつかご紹介します。

岡山県にたくさんの遺跡があることを初めて知りました



ますます歴史に興味がわいてきました



細かい作業をしていてびっくりしました



今日は見学させていただいて、ありがとうございます。

教科書などでは分からない実際の出土品の大きさや、さわったときの感かく、くわしい説明などが聞けたり、さわったりできて、とてもうれしかったです。1つ1つの土器などの長さ、重さ、はば、厚さなどを細かくスケッチしている様子や、見つかったバラバラの土器を1つ1つくっつけて、もとの形に復元している様子など、いつもは見れない物をたくさん見せてもらいました。縄文土器や弥生土器などの出土品から、その時代の人々の暮らしが分かって良かったです。

今までは、あまり歴史や土器などのことに興味がなかった私でも、文化財センターを見学すると、たくさんのが分かって興味がわきました。

これから、この見学して分かったことを生かして、社会の勉強やリリリン（総合学習）の勉強などをしていきたいです。そして、今日家に帰ったら、お父さんやお母さんに、どのようにして出土品を復元しているかなどを教えてあげたいと思いました。

(岡山中立陵南小学校 6年)



先日はお忙しいなか、私に職場体験をさせてくださり、ありがとうございました。

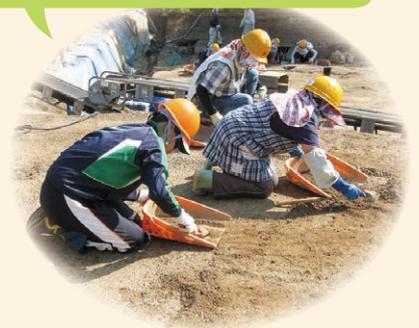
実際に作業を体験し、出土品を洗う作業や復元作業は、根気のいる大変な仕事だということが分かりました。しかし、出土品の瓦から泥が落ちて文字が見えてきた時や、復元作業で、二つの破片がぴったりとくっついた時など、感動や達成感がありました。分かりやすく、ていねいに仕事を教えてくださり、安全に楽しく作業をすることができました。

この職場体験で、私は、古代吉備文化財センターでの仕事に関する具体的なイメージを持つことができました。また、ねばり強く作業をすることの大切さ、自分の楽しいことを仕事にすれば継続できること、仕事は大変だけれど、続けることで楽しいこともあるということ学びました。

この職場体験で学んだことを今後の進路に生かしていきたいです。本当にありがとうございました。

近藤悠斗 (岡山県立岡山盲学校 中学部 2年)

発掘調査にやりがいを感じました



たくさんの破片の中から、くっつくものを探すのは難しかったです



◆ 中世の橋跡を発見

今からちょうど20年前の平成9年、中世の橋の跡が発見されました。見つかったのは岡山城から東へ約5km、旭東平野の南東部にあたる岡山市米田の百間川河川敷です。百間川は岡山城下を洪水から守るために江戸時代に造られた人工河川ですから、発見された橋とは関係ありません。中世の橋が架かっていた河川は、幅30～40m、深さ3～1mの流れ豊かな川でした。最初に橋が架けられたのは13世紀前半頃の鎌倉時代、橋が使われなくなったのは17世紀前半の江戸時代初頭で、その間実に400年、この橋は補修・改修を繰り返しながら維持されました。

土の中から発見された橋は、もちろん橋桁や、その上の人^{はしげた}が通行する部分は既ありませんでした。橋桁を支える橋脚も川底より上の部分は腐って無くなっており、残っていたのは川底より下に打ち込まれた橋脚の下半部です。土中の水分が腐食を防いだのです。橋脚は直径20～33cmの丸太材(角材も少しある)で、樹皮を剥き、先端を丁寧に尖らせ、川を横断して定期的に打ち込まれていました。橋の規模を復元すると、最初に架けられた橋は長さ約30m、幅は約3.2mでしたが、16世紀に改修され、長さ約40m、幅約2.2mの橋になったようです。16世紀の改修時には、木材と多量の石、多くの粗朶(小枝など)、そして土を使い、川底の地盤改良を行っており、当時の技術や工法が詳しくわかることが、この橋最大の特徴です。

さて、おもしろいのは、橋脚がひとところに3～13本も打ち込まれていることです。これは橋を何度も補修した痕跡と考えました。洪水等で橋脚が抜けてしまった場合は新しい橋脚を打ち直しますが、傾いた場合は撤去せず、同じ所に新しい橋脚を打ち直したのだと思われます。どうして傾いた橋脚をそのままにしたかという、引き抜くのが至難の業だったということもありますが、抜いてしまうと、そこに空洞ができて地盤が弱くなり、新しい橋脚をしっかりと固定できないからと考えられます。ですから傾いた橋脚はそのままにされました。見た目よりも丈夫さ第一だったのでしょう。

(物部茂樹)



橋跡の全景



多数打ち込まれた橋脚



編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻1325-3
TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142
<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

- 交通案内 JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分
JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分
- 業務時間 AM8:30～PM5:15
- 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始
- 展示室の開館 AM9:00～PM5:00

年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。
ただし、臨時に休館することがあります。